

# 三河アララギ

平成二十三年

十一月号

第五十八卷 第十一号



ニューヨーク日記(61) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

September 9, 2011 : GUESS WHO !

## Blue Shoe Diaries



iPhone持っていると色々できて退屈しない!ちょっと友達を待っている時とかこんなこと出来ちゃうのよね。今ShoeLadyに我が家の人気者達を写メールでこれ送っちゃった。ウケたかな?って言うか私一人で道ばたてウケちゃったじゃん!かわいいでしょ?

Having an iPhone could help productivity but it could also be the contrary. There are just too many fun apps! You can do things like this while waiting for a friend to show up. Aren't they the cutest? I just SMSed this to ShoeLady. I hope she'll have a laugh. At least I did,like a crazy person ...in public. Glad I live in NY. No one cares!

# 目次

## 第五十八卷第十二号(通卷六九五号)

表紙 裏窓

ニューヨーク日記(61)

感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」

歌集一本の木

芒の花穂

力士うるはし

CTスキヤン

螢火

変わり無し

あこがれ

奥三河

過疎の村

海山の

百舌の声

拝礼

風がはこぶ

働き者

取られじと

晴れ渡る

台風の爪跡

伊吹山

干瓢

茄子紺

今泉 由利(1)

Blue Shoe(2)

杉浦 弘(5)

岡本八千代(6)

白井 久吉(7)

今泉 由利(8)

伊藤八重子(9)

弓谷 久子(10)

青木 玉枝(11)

内藤 志げ(12)

林 伊佐子(13)

胃甲 節子(14)

安藤 和代(15)

清澤 範子(16)

金津 文枝(17)

半田うめ子(18)

伊与田広子(19)

近藤 映子(20)

伊藤 忠男(21)

北川 宏廸(22)

杉浦恵美子(23)

堀川 勝子(24)

時代を見たり

ひとり占め

記憶

田原西陵(1)

秋桜

現代学生百人一首

「ことよせ」

贈呈誌

九月号

「俳句」

絹の話(11)

物理学者と詩歌の世界(22)

斎藤茂吉と御津磯夫二

和歌から派生した季語の本意(その十六)

「氷魚」のことから(130)

ことのはスケッチ(395)

和菓子街道(61)

お知らせ・編集後記・三河アララギ規定

平松 裕子(25)

小野可南子(26)

山口千恵子(27)

夏目 勝弘(28)

秋山 逸穂(29)

東洋大学(29)

いーはとぶ(30)

稲石 せき(30)

白井 信昭(30)

植村公女(32)

一石(32)

喜仙(33)

皓一(33)

今泉 雅勝(34)

一石(36)

鮫島 満(38)

佐藤 喜仙(40)

岡本八千代(41)

今泉 由利(42)

平松 温子(43)

お知らせ・編集後記・三河アララギ規定

(44)

## 感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より

高き葉の霜にちぢみてなほ青し花あるダチュラ囲ふ日となる

P  
184

いづこよりいつ来りしか忘れはて返り咲きとも冬の蘭とも

P  
185

歌集 「一本の木」

杉浦 弘

三つにて別れし母の名を思ふああどうしても浮かんでこない

いにしへの池より海に下る道浜岡原発の塔遠く立つ

年逝きてさらに近づく箒星われの一生の天変ひとつ

## 芒の花穂

蒲郡 岡本八千代

遙けき人思ひつつをり今朝のあさ芒呆けてしろじろ花穂

朝の水光り流るるを手を受けて己の顔を洗ふしあはせ

東京より曾孫<sup>ひい</sup>つれて来たりけりつひに母親になりし孫むすめ

赤子泣けばなほなほ愛<sup>いと</sup>し今にしてただおろおろの曾祖父<sup>そうぢい</sup>曾祖母<sup>そうばあ</sup>

乳<sup>ち</sup>飲<sup>のみ</sup>子の乳のむところ見てをりぬわれもその場を離れたくない

柔らかき可愛ゆき紙の襦袢かけてはやも赤子は眠りつきたり

初々しき赤子の泣き声しばししつつ三日ばかりのわが家の活気

花すぎてまた花すぎて三たびめのエンゼルトランペットの白妙の花

わがダチュラ仰ぎみるたび自づから「自然<sup>じねん</sup>法<sup>ほう</sup>爾<sup>に</sup>」の言葉つぶやく

赤子らの帰りゆきたりこの夕べまた二人だけの夕餉の仕度

## 力士うるはし

新城 白井久吉

おほげさに言へば百姓を趣味として九十歳までは努め来りぬ  
つく息は聞こえむばかり取り組みを今終りたる力士うるはし  
ただならぬ暑き日なりき多治見にて今年最高四十度を超すと  
父や母のいますころにはニガウリもオクラも口にするはなかりき  
台風は過ぎ去り朝となりたるも川沿ひの田畑は冠水のまま  
大根の抜き菜も今は少なくて緑野菜の貴重なひとつ  
ナツメの実色づく見れば不思議にも「水師宮の歌」を口遊くずさむなり  
一年の労働日数予想には一〇〇日以上と書きしにかなし  
今でこそ不要物なる礮臼ひょうづすも捨つるには惜し庭に据ゑおけ  
豊川の大洪水の退きて後舟繫石を改めて見る

## CTスキャン

東京 今 泉 由 利

この星をティラノサウルスも見しならむ地球の上に繋ぎて生きる

恐竜の化石頭骨のCTスキャン何を思ひし脳が存在

モクレン属椰子公孫樹タコノキと白亜紀より今に続くを

石の中に石と化したる恐竜をしみじみとしてしみじみとゐる

骨折の直りし化石のありといふ戦ふ恐竜現実となる

昔々私のはじめの油絵はその色知りぬし如き始祖鳥

恐竜の糞の化石のイネ科植物今日の田んぼの稲のみのりへ

けいとうの今年咲きぬる朱の色その色をぬる去年の素描に

歩みゆくセントラルパークへ歩みゆくまた歩みつぐメトロポリタン恐竜館

地球上の最後の恐竜ティラノサウルス化石と化した骨のつめたさ

## 螢火

豊川 伊藤八重子

大空を白く刷きたる淡雲の何時しか消えて澄みし秋空

一人では何も出来ない病室に人の情の沁みるけふの身

着替衣も新聞も葡萄も病室に届けてくる卒寿の夫

退院の人を見送る三階より黄ばむ稻田の拡がる三河野

眠る顔は今も幼し吾が娘真近に寝ねゐる病室の朝

学も実も無きままわれは大らかに支えられ来し夫との歳月

娘来て老いしわが身の衣替えを手伝ひくれぬけふを楽しく

茶筴筒の白き器にやはらかく光差し込み秋彼岸ゆく

ネットを覆ひ鳥害防ぐ柿の木に青き柿の果三つ残りぬ

三度目のペースメーカー入れ替えぬありがたきかな八十五歳

## 変わり無し

豊川 弓 谷 久 子

変わり無し無ければそれでよしとせむ日記書き終へ一日が終る  
我がくらしストップさせて読み更ける犯人逮捕にあと数ページ  
わだかまりいつか解けゆく仲秋の名月の今日我が誕生日  
さつま芋一畝掘りて誕生日にと届けてくれし父を憶ひぬ  
砂粒程の楽しき思ひ出捜しをり八十四年の我のみちのり  
来年もと言ひて別れて早一年今年も逢ひぬ君の笑顔に  
深川より大垣までの写真集ガイドブックは「おくのほそ道」  
今宵より芭蕉の旅を辿り見むまずはみちのく白河の宿  
荒れ狂ひ台風去りたり我が庭に虫の音すだく夜の戻り来ぬ  
蟋蟀と共に聞えぬし鉦たたき耳をすませど今宵は聞けず

## あこがれ

伊丹 青木 玉枝

試歩つづく川岸に立てば心持良き日暮れの涼風<sup>かせ</sup>を胸深く吸う

故里へあこがれのうづく日びにして足萎への今足なでるばかり

デューサービスの習字の時間始りぬ心静めて筆のはこびを

花水木の木蔭に寄りて涼求む杖を頼りの残暑の真昼

春咲きし蜜柑の白き花は今緑つやつや丸き実幾つ

歌会への手さげの中の必需品ペンとルーペと老眼鏡と

今の世に二百十日も二十日も言ふ人もなく台風は来る

いわし雲の浮べるさまを見上げつつ三河の水害如何ばかりかと

イヤホーンを耳に入れきく深夜便何時しか眠りについてしまひぬ

夜半さめて逢ふこともなき千葉の孫思ひ眠れぬ一夜ありしも

## 奥三河

豊川 内藤 志げ

高くより竹の千切れ葉庭芝にひらりひらひら模様を作る  
宙を舞ふ竹の千切れ葉窓越しにひらひらと舞ふきりきりと落つ

閉したる窓よりの音聞えざり吹き抜く風も竹の騒ぎも

紫の葉裏を見せてスベリヒユ小草の多し人參の畝

高く咲き風に揺れつつ酔うごとし八重の桃色酔芙蓉の花

奥三河くねりくねりて山の道友は運転私は助手席

山峡の稲田を渡る風涼し五平餅頬ばる名倉の店に

近くにてミーンミンミン澄みて鳴く杉の大木田峰の境内

九月まで芽を摘むなど教はるる松の緑はうっそうとなる

電線に千羽の雀賑々し台風の雲に夕暮れ早し

## 過疎の村

岡崎 林 伊 佐 子

過疎村の一本道の行き止まりそこにわが家の住家のこれり  
雲間より満月照らす廃村が見え隠れする山家の二階に  
いつ来ても人影のなきわが里を道祖神は守りてをりぬ  
不便さも静寂もある山の家昔のままに家具のこりをり  
広き土間あるき働く飲食に足も疲るる昔のくらしは  
抜き捨てし露草の花は庭隅に藍ささやかに根付きて咲きぬ  
馬鈴薯も玉葱もみな保存する山家は広く物置くところ  
玉葱の皮を煎じる薬湯はあかがね色の淡泊な味  
薬湯に血圧さがりて九月より薬を減らすと主治医の告げる  
爪楊枝つかひては折る千羽鶴出産近きひまごを待ちぬ

## 海山の

豊橋 胃 甲 節 子

海山の違ひはあれど津波又山津波も言葉にならぬ悲しみ

台風の漸く去りて晴れ渡る九月六日よ風鈴しき鳴る

銘店のお菓子を贈る事あれど吾が為に買ふ事は無きなり

戦きて怖れし昨日の十五号台風夢にも似たり今朝の青空

吹き返しの北風寒く窓閉めて台風被災の人等を案じぬ

天災の甚大なるは天の罰自然を毀す人間の罪

老々の病めば互に頼り無く途方に暮るるよ空青くとも

彼岸花の蕾十本出でし鉢台風にも折れず吾を喜ばす

枯れ果てし交譲木ユズリハより移したり風蘭は根付く椿の枝に

曼珠沙華咲き続く列島只一人別れの帰省の哀しき想ひ出

## 百舌の声

豊川 安藤 和代

猛暑にも勢い伸びる庭草に吾が体力のすでに負けおり

鉢とればダンゴ虫ぞろり逃げながらくるりまん丸まるまり上手

軒下を蟬の亡骸ゆるりいく蟻よ急げよ夕せまるゆえ

バラの香のポディーシャンプー好みいる孫はいつしか大人の香のす

年ごとに亡母に似て来し吾が顔よまじまじと見る今朝の鏡に

進路にも悩んでいるや高三の孫は時どき無口となれり

百舌の声澄む青空に響きいて私の好きな秋となりゆく

部屋に入る風心地よし吾の飼う鈴虫の音の一段とさゆ

久びさに街中ゆけばウインドのマネキンは早秋を装う

庭梅の木肌に紛う螻蛄が動かずにおいて秋深みゆく

## 拝 礼

春日井 清 澤 範 子

夕焼を見るも束の間日は暮れて虫の声ききつつ厨に立ちぬ

八十歳になりたる夫は市長より敬老の祝有難く受けぬ

勤め終へし娘の運転慎重にてスーパーマーケットに買物に来ぬ

手術せし夫の全快祈念して娘と八王子神社に拝礼

寝つき良き夫の癖なりこの夜も額に両手を当てて眠るも

手術して腰曲げられぬ夫の世話ズボンはかせるコツ覚ゑたり

庭にある百日紅はこぼれ咲き一日遅れの名月を見る

秋の日のつるべ落しの陽は沈む庭のどうだん小枝光りぬ

剪定せし赤白混りの花椿幹よりちぢれ葉先は丸ろし

今朝晴れて蟬の声弱く夕べには蟋蟀の大きく太き声聞く

## 風がはこぶ

島根 金津 文枝

九月二十日カーテン一枚区切りの四人部屋二〇二号入院す

左手の甲にボールペンで私の体温血圧を書いて病室を出るナース

夕食前の薬配るナース病室へコンピュータ持ち来て

午前七時おはやう様と目覚めの音楽病院中に響き伝はる

カーテンを透き通りくる朝の陽病室次第に明るくなりぬ

風が運ぶ鳥が落すか我が庭に次々植物殖えつづけゐる

月齢十五なれば午後十一時煌々たる光に障子明るく

ブロック塀に蝸牛一つ宿りいて日毎に場所変え移りゆく

秋場所隠岐の海日馬富士に勝ち琴欧州にも勝ち二連勝嬉し

九月十三日三十一度敷蒲団掛布団干しふつくらの良し

## 働き者

新宿 半田うめ子

ひんがし  
東の杉林の方今日も又からすのあつまりからすのさわぐ

テレビ見る事出来ぬなり買ひしよりうつりの悪く残念なりぬ

孫二人食品作りて吾のためやさしく又働き者なり

茶道にて皇風流なり代表の伊勢神宮へ参拝したりき

熊蟬の啼きて居るなり柿の木の葉かげより見ゆにぎやかなりし

楽しみて待ち居りたるも紅梅の実一つ無く淋しかりけり

せりほしく今朝も川辺を歩くなり杖をつきつつ夕陽に向ひ

道の辺のおしろいの花紅の花黄の花の咲く楽しみて見る

水筒の中へ入れたり味噌汁の味よくして孫のもちくる

## 取られじと

豊橋 伊与田広子

台風の圏内入りて洪水にわが住む所砂ぼこり立つ

終戦後埋め立て家建ち大雨に床下浸水床上もあり

わが町も都市化さるれば雨水など殆んど下水に流ると言ひし

下水管<sup>かど</sup>太かりければ川からの吹き出し水も排出せむか

原発は今すぐ廃止して欲しき又事故起れば日本中汚染

秋分を迎へてやつと冷房なく肌に優しき風の吹くなり

百貨店イタリヤ展にて猫の絵の盆を買ひたり親猫子猫

われのため残されし思ふ猫の絵の盆は親猫と子猫四匹

他の客に盆取られじと手に持ちて他の商品を見て探すなり

一匹の子猫真正面向き視線合ふ言葉かけたくなりし気持に

## 晴れ渡る

名古屋 近藤 映子

日中の残暑は腕にジリジリと日傘の間に照りつけきたる  
曇り日の蒸暑き日々よ今日も又夫の見舞いに出掛けてゆかむ

残暑とて三十度越す強き陽に夫を訪ぬる時を夕方に

数え年七十七の葉月の末よ無事に猛暑を越え来たりしを

バス降りて夫居る病院に向ひ行く生垣より伸びしおみなえし黄

日中は三十度越す暑さなれど夕の帰宅路涼風となり

我夫に昨夜は「中秋の名月」くつきりと今夜は十六夜なるを話す

見降しの香流川の増泥水見る間に水位の上り来る様

どんくくと水位の上るを見降しぬ草木倒され流れゆきゆく

晴れ渡る秋分の日の墓参り息子夫婦と娘の運転にて

## 台風の爪跡

大阪 伊藤忠男

嵐去り爪跡残る里の秋とぎれとぎれの虫の声あり

日高川静かに流れし今あるは水の濁りと積まれた瓦礫  
被災地に訪れきたり秋の風スキに菊にコスモスの花

雨降れば葉音よろしき裏山の異変疑う災害の後

雨の中避難の指示も茫然と聞き流すのみ地響のする

蒸し暑さ残る長月秋雨にようやく涼しき風吹ききたり

打ち水に鈴虫の声ふととぎれ月は静かに月あかりして

雨音はかき消されたり窓ガラス写るは友の弾ける笑い

喜びの数を数える指おりて思ひ浮かべる懐かしき友

雨粒の傘にあたれる手応えに心痛めしトラウマ消えぬ

## 伊吹山

東京 北川 宏 廼

あらためて魚図鑑に目を遠し崇あがむるごとく泥鰌をながむ

「どじょう」より「どぜう」が似合う野田首相優柔ではなく硬骨であれ

次の旅行はアメリカにしゃういやドイツふたりは所詮ひとりひとり

誰れもかも不機嫌となるこの暑さ妻の諍いさかひわれに向かへり

一人われ誰憚らぬ大欠伸残暑の午後はコーヒー点たてて

帰宅して誰もいないといふことに安らいでゐる心の不思議

パパゐるの訪れてきて少しだけ居眠りをして息子は帰る

節電の暗き地下駅出て来れば表参道カーンと明るし

立ち疲れ歩き疲れて空見れば超高層にぽっかり満月

風わたる蓮田の果ての夕空に肅条せいでうとして伊吹山たつ

## 干瓢

蒲郡 杉浦恵美子

昨夏に夫漕ぎ行きし大島が小山に立てば遥かに見ゆる

夫の居ぬ八月虚し去年の旅反芻すればなおさら哀し

迸る水の行方を見つめ居り廃業五ヶ月もう戻らない

千万町ぜまんじょを偶然通るああ此処は訪れたりき若き夫と我

若き頃訪れし時千万町ぜまんじょは山また山の奥と思ひき

缶ビールぽつんとひとつ残り居り冷蔵庫の奥夫入れしまま

アウトドア派の夫の残しし日焼け止めそのまま残りて今夏も過ぎぬ

干瓢を戸棚の奥に見ついたりそうだ巻き寿司作ってみよう

有り余る時間が癒しになりて欲し干瓢戻す間ことと煮る間

つれづれに作ってみたが巻き寿司をこんなに沢山誰が食べるの

## 茄子紺

豊川 堀川 勝子

うつすらと土埃り積む庭の木々解体工事の今日始まりぬ

台風の進路予報に息詰める解体途中の吾が家危ふし

気前よく玄関扉を手放して疾風の恐怖今更に知る

重機にて無理矢理毀ちゆく家の悲痛な叫びまぼろしに聞く

重機にて破壊されゆく壁柱を目を逸らすなく見守りやらむ

毀たれし家の空地に佇めば今宵満月空高く見ゆ

家毀ちふいに明るさ一ひとところ区切り空に満月清すがと見ゆ

茄子紺の富士の高嶺は雲間より僅か見多つつ父納骨の旅

茄子紺の富士山の見ゆこの辺り父の生まれし三島の郷よ

農作業に勤しむ我に理不尽なるカバン盗みし何者かあり

## 時代を見たり

豊川 平松 裕子

玄関を開けてくれよか鳴く猫の声続きをりまだ続きをり

日照<sup>そぼえ</sup>雨降る台風近づくこの朝矢羽根梵天は大きく揺るる

跪<sup>ひざまづ</sup>き仰向く「女」の像の前我が内に覚むる何か湧きくる

内部より苦悩の色の見えて来ぬただブロンズの塊なれど

下駄ばきに歩みてゆきぬホテルより千曲川への朝の散歩に

千曲川に出づれば水の豊かさに明るく広がる朝の空気の

潮見坂を越えゆくときぞ降り立ちて歩みたき砂浜そこに続けり

ガラス戸の二枚を素早く拭き上げて店に出でゆく時刻となりぬ

両の手に包みて見入る鍋島の青磁の小皿の澄みし緑の

見込内に描かれてゐる梅花紋瑠璃の茶碗の時代を見たり

## ひとり占め

豊川 小野可南子

朝庭に業平竹の乱れ揺るる未だ遠くの台風の風

今日の日の空の白雲くろき雲あやしき風に定まらぬまま

白雲の定めなきまま今日の日よ何をせむとぞただ慌し

一列に小さき足跡たしかなり雨の上りし佐脇野の畑

キツネかと思ふ足跡一列に乱れもあらず我が野畑なり

隣家の屋根にかかれるひとつ星木星ならむ巨き輝き

四方より湧きのぼりくる黒き雲丸き天空を覆ひゆきつつ

のろのろ台風遠く去りたり此の宵の濁りなき空の星のまたたき

月光と紛ふばかりのひとつ星朝明け遅くなりたる空に

午前四時慣ひとなりぬ見上ぐ空オリオン星座をひとり占めする

## 記憶

豊川 山口千恵子

出穂の田の面大きく靡かせて台風余波の風渡りゆく

台風のなごりの風に靡く稲穂波に高く稗の穂みゆる

仰向きに地面にころがる油蟬その腹白し夏過ぎてゆく

ぶらぶらり糸瓜三本下がる棚木洩れ日ちらちら糸瓜忌ちかし

糸瓜棚の緑を透る木洩れ日の今朝の光は秋めくひかり

起こしたる土は僅かに湿りもち夏日に白く乾きたる畑

蜜柑畑剪り払はれて赤々の原になりたり道路が通る

開墾しみかんを植ゑし若き日の父の姿はわれのみの記憶

この村に生れこの村に嫁ぎたりき八十七年生き給ひたり

みはるかす山並に湧く白き雲雨の上がれる葬り処の庭に

田原西陵 (1) 豊川 夏目勝弘

先師らの敬ひ詣でし高円の西陵への願ひ今かなへむとす

ひたすらに思ひつづけし二十余年志賀皇子の陵みささきに逢へる

荒れはてし春日宮かすがのみやへの道思ひドライブウェイにタクシー快適

タクシーの運転手のお蔭にて春日宮の陵の前

二時のバス逃がせば六時までバスは無し田原東陵には行けぬかもしれぬ

石造り古式の鳥居一つのみ裏手の山より枝打つ音す

四方の山また陵も静かなりサワラビの歌声にくりかへす

目の前の景を思ひにうち消して垂水の上のサワラビ浮ぶる

秋萩は皇子の形見ぞ見つけむと高円山をただに歩みぬ

## 秋 桜

「招待」 秋 山 逸 穂

わが丈を優にこえいる葦原にあそびのようにもぐり込みゆく

家族みな眠りにつきし部屋にいて遠くに聞くは虫の輪唱

瓶開くるとき泡だてる炭酸の音の悲しさ秋の深夜は

浮雲の端を白白かがやかせ十五夜の月輪郭見せる

秋桜の風にゆれている線路ぎわ都電ゆつくりと通りすぎゆく

現代学生百人一首 東洋大学

土日にはとても優しいお母さん寄宿生活悪くないかも

岡崎盲学校 三年 石 原 達 也

あの夏のはなしする祖父ふと見ると目元が少しうるんで見えた

金蘭千里中学校 三年 杉 村 光 咲

「こんにちは」たった五文字のジャパニーズ千の気持を伝えてくれよ

広島新庄高等学校 一年 森 末 和

おにぎりを作る母の手見て思う私はこの手に守られてきたと

広島県立総合技術高等学校 二年 脇 本 奈 緒 美

『いふよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

日本海さざ波青く広ごれり今朝は能登路を君とわれとは

吉見幸子

午後に来て宵には帰る娘二人今年の盆はウイークデーの仕事

牧原正枝

住む人なき廃家の隣に赤きポスト残りてゐたりこの作手村

岩瀬信子

この一刻ひとまたとなきかと君と飲むアールグレーの苦きほろほろ

三田美奈子

初めての線香花火を恐がりて我が手を添へぬ明日は孫帰る

稲吉友江

いつしかにケヤキ並木に雨傘もささずに「モネ」の帰り道

鈴木美耶子

九十三年の思ひ出

豊川 稲石 せき

わが一生ひとよ貧乏くらしに慣れきってケンカも知らず楽しかりけり

過ぎてこし九十三年の思ひ出を胸にたたみて今日も楽しく

豊川 白井 信昭

安濃津あのつに液状化の跡残りしと伊勢神宮記は今に伝へり

黒雲の朝より低く垂れ込めり東より西へ風吹きてゐる

贈呈誌 九月号

「愛媛アララギ」

西崎美紀子

川岸に勢ひ伸び立つ葦のむれ静かな流れに緑を映す

松本マス子

今年限り今年限りかと庭の木の剪定をする脚立に上がりて

「鹿児島アララギ」

山本和男

吹きたわむ風に炎の起るとき野焼きの山に山鳩が鳴く

泊興子

いづくにか木魚の音が聞えくる秋立つ朝の涼風の中に

「高知アララギ」

藤田信宏

雪解けのひかりの中にほつほつと立ちてちひさく花つつみある

佐竹玲子

かまふなく森の夕べを行きめぐり唯に充ちくる心と思ふ

「滋賀アララギ」

北村富士子

縦に書く文章はいつしか左側に斜めに歪みてゆけるこの頃

安藤萬喜男

足腰の弱らぬ内にしたき事数へあげればまだまだあるぞ

「冬雷」

飯泉喜代

今日は雨今日は暑しと手入れなき芝生に盛るもちずりの花

赤間洋子

梅雨明けて馬鈴薯を掘りつつ思ひ出す植付けの日に大震災発生

「柾」

桑原一枝

鉦を振るひ払ひし枝より清すがと生木の匂ひ立ち上がりたり

富田福美

なごやかに夕べの色の移るまで草引く後に杜鵑なく

「群山」

安部道

放射能降る日思ひて詮なければまづは植ゑむかレタスを紫蘇を

高橋良子

こぞり咲く姫シヤガの花揺らぐ庭に余震のあとの心なぐさむ

「榎の木」

望月睦世

ことごとく茶葉伐り落すは難儀なり大きく伸びし茶の畝の前

伊東柁子

水を待つ神の田圃に蛭蝶もつれあひつつ長く舞ひをり

「穂の原」

田中浄子

黒瓜の苗に紛ぎれしか黄瓜の浅き黄色の玉数見ゆる

中井美恵子

渦巻きの蚊取を二つ腰に下げ藪蚊恐れつつ庭の草取る

「俳句」

達筆の詫び状なりし秋桜

植村公女

秋涼や書店にさがす新刊書

炎昼や電信柱の影に入る

点滴や日ごと弱まる虫の声

一石

病み人となりて心は紅葉狩り

天高し我生還す人の世に

横穴に人骨出でて鶉鳴けり

喜仙

一茶逝きぬ土蔵の中や風涼し

秋灯の早々点る木曾の宿

また咲く日どころもかしこも曼珠沙華

皓一

夕まぐれ急ぐ家路の虫の声

赤とんぼ想い出の地は三つ四つ

## 絹の話 (11) 「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

### 絹と小判

日本の養蚕の始まりは定かではありませんが、日本書紀（神台上）に繭から糸を繰ると思われる記述が有り、魏志倭人伝に倭国から献上品の一つとして班布二匹二丈がもたらされたと記されています。班布とは実際どんな織物かわかっていませんが、

当時の日本では湯に浮かせて糸をひく技術が無く、繭を口も含んで糸を操っていたようで、班はマダラとも読めますので、卑弥呼は精一杯の物を持参したのだが、中国側から見れば、あまり高級品とは思えなかったと推測できます。

魏の皇帝から卑弥呼に答礼として沢山の品々が贈られてきた中に、紺地句文錦（コンジコウブンキン）三匹、白絹五十匹とあります。既に中国では目のさめる様な錦が織られ、おそらく持参した班布より美しい白絹が生産されていたでしょう。

この絹生産流通の流れはなんと江戸時代はおろか明治まで続きます。

日本では7世紀頃から湯に浮かせて糸をひく事が一般化して、絹布生産が飛躍的に伸びてゆき、江戸時代になれば各藩は殖産興業の為、競って絹織物を特産品として販売する様になります。それが現在地域名を冠した有名な織物に発展しています。

ところが、江戸時代、長崎に着くオランダ船には大量の絹織物が積み込まれていたのです。その中は日本で作られるよりも上等な絹が多かったと思われませんが、日本の商人達にとつて、藩を越えて煩わしい手間を掛けるより、海運業の発達もあり、まとめ買ひして売りさばいた方が利益になったのかも知れません。中には金襴、錦、緞子、飛白（緋）等は渡り物として高価に売れた物もあった様です。

ただ今日の様に受注を受けて品物を運ぶと云うのではなく、見計らいの積み荷も多かったので、オランダ商人は何ヶ月も荷捌き出来ず長崎出島に逗留する事もよくあったようです。

元禄時代を過ぎる頃から次々城下町は発展し、流通は活発になり、商人の台頭はめざましく、富裕層がどんどん生まれ来て来たのです。

幕府は相変わらず農本主義で、米の物納を基本にしてい

て、商業の発展に遅れをとるばかりか、発展する商人から税を徴収するシステムが確立していなかったので、財政は厳しくなり、節約を旨とし、奢侈禁止令を次々に出して行くのです。ところが面従腹背で、商人の着物は表は棉の無地の藍染でも、裏地は舶来のこれでもかと云うような生地を使い、羽振りを競っていたようです。

幕府も金山を開発に力を入れ、小判を作り財政の立直しを図るのだが、多くが商人に渡り蓄財されてしまい流通貨幣不足になって行きます。

その大きな要因の一つが絹の輸入でありました。江戸初期の長崎のオランダ商人は絹の取引の決済は慶長小判を要求していました。

慶長小判は金の純度が高く、絹で儲けて金で儲かると云う仕組みです。

慶長小判は早々となくなりましたが、次ぎなる小判で決済していました。ところが江戸末期になると幕府は貨幣改鋳を押し進め、小判の金の純度を下げて流通量を増やしたので、そうするとオランダ商人達は小判を拒否し、一朱銀を求めてきたのです。

小判と違って、南蛮船いっばいの絹の支払は、膨大な一朱

銀を要します、急速に一朱銀も減少して行きましたが、銀は生産量も多く、一般の流通貨幣で総量も多く混乱を招く事も無く明治に至るのです。

ここで不思議な事は流通小判が減少するほど何百年も絹を輸入し続け、それを許したか、黙認してきた幕府は事態を理解していたのか否かと云うことです。

また、奢侈禁止令を横目に見ながら、絹の輸入が一国の財政を傾けるほどの需要があったことにはおどろかさざるを得ません。

卑弥呼の時代から今日まで、日本は明治以降関税障壁を作り絹の輸入を制限した一時期を除いて一貫して中国から絹を輸入し続けてきました。

これからもさらに増加してゆくでしょう。しかし長い歴史の中で一般民衆は繭を作り、機を織ったが、絹を日常に着た経緯はありません。

絹と小判、民衆にとってどこか共通する物が無いでしょうか？

慶長小判は昨今では骨董価値も高い様ですが、かなりの量が渡ったと思われるオランダで発見されたという話は聞いたことがあります。殆ど改鋳されてしまったのでしょうか。

## 物理学者と詩歌の世界 (22)

一石

### ジョン・フォン・ノイマン

ジョン・フォン・ノイマン (John von Neumann 1903 - 1957) はハンガリー出身の数学者・物理学者。「最後の万能学者」と言われ、研究分野は数学・物理学・工学・経済学・計算機科学・気象学など極めて広範囲にわたった。第二次世界大戦中の原爆開発や、その後の核政策に関与した(参考資料1)。

1903年ブダペストにユダヤ系ドイツ人の銀行家の家に生まれた。6歳でギリシャ語を話せ、8歳で微積分をマスター。また、12歳の頃には関数論を学ぶなどの神童の振りであった。1914年にギムナジウムに入学、卒業後ブダペスト大学の数学科に進学しつつベルリン大学とチューリヒ連邦工科大学を掛け持ちして化学工学を学んだ。23歳で数学・実験物理・化学の博士号を同時に授与された。

1926年ゲッツティンゲン大学でヒルベルトに師事。1927年最年少でベルリン大学の私講師となる。1930年代、ナチス政権から逃れ、ノイマン一家は米国に移住、プリンストン高等研究所の最年少会員に選ばれた。4人のメンバーにはA・アインシュタインと不完全性定理を証明したクルト・ゲーデル(参考資料2)がいた。1933年以降この研究所で数学の教授を務めた。

数学・純粹数学では、数学基礎論、集合論や測度論、作用

素環論、エルゴード理論に貢献した。またゲーム理論の基礎を確立し、ミニマックス定理を証明。この証明は企業経営の戦略理論や、軍事戦略の基礎理論、ゼロサムゲームにおける戦略などに指針を与えた。数学基礎論ではゲーデルとは別に、第二不完全性定理を発見している。公理的集合論の正則性公理を提唱した。

物理学・量子力学に数学的基礎付けを与えた(『量子力学の数学的基礎』、みすず書房)。彼は波動関数の収縮という現象は、量子力学の数学的枠組みで説明することができないことを証明し、コペンハーゲン解釈の確立に多大な影響を与えた。

気象学・気象予測に数理モデルとコンピュータを利用する手法を持ち込み、気象力学の分野の草分けの一人となる。

経済学・O・モルゲンシュテルンと共に経済学にゲーム理論を持ち込んだ(『ゲームの理論と経済行動』、筑摩書房)。この応用をもつてゲーム理論の本格的な幕開けとされる。

計算機科学・今日のコンピュータの動作原理である「ノイマン型コンピュータ」の考案者。また、セル・オートマトンの分野を自ら創出し、自己増殖の事例を示した。その他、数値流体力学の分野で「人工粘性」のアルゴリズムを開発し、精度の高いコンピュータ・シミュレーションの実現に寄与。この研究はその後の天体物理学の分野や、高度なジェットエンジンやロケットエンジンの開発で大きな役割を果たすことになった。著書に『自己増殖オートマトンの理論』(岩波書店)、『電子計算機と頭脳』(ラティス)がある。

核兵器開発への加担・青年期に経験したハンガリー革命、

アーサー・ケストラーの『真昼の暗黒』やスターリン政権下のソ連への短い旅行などを通じて、ソ連に敵意を燃やすタカ派となりソ連への核攻撃を強く主張した。また、原爆開発のためのマンハッタン計画に参加。原爆投下に際し、京都への原爆投下を進言。赤狩りの際はエドワード・テラーと対立してR・オッペンハイマー（参考資料3）を擁護し、ソ連のスパイだったクラウス・フックスとの共同作業で自身も非難されている。このような側面を持つノイマンは、スタンリー・キューブリックによる映画『博士の異常な愛情』の登場人物のモデルの一人とされる。

マンハッタン計画や太平洋での核爆発実験の観測の際に放射線を浴びたことが原因となつて癌を発病し、最期を迎えた。マンハッタン計画に参加した多くの科学者・技術者が晩年癌を発病している。E・フェルミ、R・オッペンハイマーは共に53歳で死去。

フォン・ノイマンには多くの逸話が残されている。

○驚異的な計算能力と特異な思考様式、極めて広い活躍領域から「悪魔の頭脳」、「火星人」、「高精度で噛み合う歯車の完璧な機械」などと評された。

○ある日、水爆の効率概算の計算で、ノイマン、フェルミ（参考資料4）、ファインマン（参考資料5）と計算の速さを競った。その際フェルミは大型の計算尺を、ファインマンは卓上計算機を使ったが、ノイマンは暗算で行なった。結果は、ノイマンが最も早く正確な値を得た。また自身が開発に関与した電子計算機のENIACにも計算の速さで勝利、「自分の次に計算の早い奴が出来た」と喜んだ。

○ノイマンの天才振りについてのジョーク。死後「彼は人間の振りをするのが非常に巧い悪魔だったが、余りに上手過ぎて自分を人間だと思ひ込んでしまった。」ノイマンがノーベル賞を受賞しなかったのは、人間であることという受賞資格を満たさなかったからだ。彼が発案したゲーム理論は経済学分野でノーベル賞受賞者を何人も生んでいる。

○ある数学者がある難問を3ヶ月間さんさん苦心して解いたが、ノイマンは数分で正しい結果を導いた。

○ゲーデルの次に第一不完全性定理を理解したといわれている。ゲーデルのことは生涯高く評価・尊敬した。

○興味が無いものには全く無関心で、数十年住んだ家の食器の位置も、昨日あった人の名前すらも覚えていなかった。

### 参考資料

- 1) フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』:フォン・ノイマン
- 2) 吉永良昌、『ゲーデル・不完全性定理』、理性の限界の発見」、講談社
- 3) 三河アララギ、R・オッペンハイマー、p 36、第58巻、第1号(2011)
- 4) 三河アララギ、E・フェルミ、p 36、第58巻、第5号(2011)
- 5) 三河アララギ、R・ファインマン、p 36、第57巻、第12号(2010)

## 斎藤茂吉と御津磯夫 二

「月虹」 鮫島 満

茂吉は名古屋や三河の萩の花の状態を調べたいのである。それは、右の万葉歌の中の「榛原」を文字通りの榛原ではなく「萩原」であるとする説を補強するためである。「秘かに御調べ願上候」というところには真剣なあまりの滑稽さが出ている。書簡中の「十一月十六日ごろの」(圈点付き)は右の万葉歌が作られたとする太陽暦の月日である。これは、小宮豊隆との〈蟬論争〉のために芭蕉が「静けさや岩にしみる蟬の声」を作った時と同じ条件の日の蟬の声を調べたいと同じである。また、茂吉は手紙に今泉忠男の名は書いていないが、「三河の宝飯郡、御津町あたりの萩の状態」と書いたのを受けた堀内が同じアララギの、御津に住む今泉を頼ったのは当然のなりゆきであったと言えよう。

茂吉はちょうどこのころ、山形に暮らす門人結城哀草果にも「萩の調査ありがたし。鎌倉ではいまだ満開の処あり(極楽寺境内)そこで御調査願ひ候次第也」(昭和十三年十月十五日付)と手紙を書いている。茂吉はこのころ信頼のおける門弟に広く調査を頼んだのかも知れない。

堀内の調査の結果は、茂吉の堀内宛の書簡、「ありがたう。たとひ一株でもよし。しかし、『榛原』はモミヂかも知れん

な」(昭和十三年十月二十五日付)によって一株しか花は残っていないかったらしいことが読み取れる。「萩原」に自信を失いかけていたようでもある。

茂吉が調査を急いでいるのは『万葉秀歌』の完成に間に合わせなければならぬからである。この本の第一刷が岩波書店から出されたのは昭和十三年十一月二十日であるから、「萩原」に自信がなくなってもう押し通すほかはなかったと思われる。『万葉秀歌』が出来上がるころ茂吉は堀内に次の手紙を書いている。

○引馬野の考証大にありがたく御礼申上候、御骨折感謝の至に候

○ただし小生はやはり「萩の花」と結論いたし申候、○「秀歌」そのうち寄贈いたすべく候、(中略)○秀歌には、今泉忠男氏のこと書きもらし候、これは増補するつもりに御座候  
(昭和十三年十一月二十四日付)

茂吉は『万葉秀歌』において右の歌について、「一首の意は、引馬野に咲きにほうて居る榛原(萩原)のなかに入つて逍遙しつづ、此処まで旅し来つた記念に、萩の花を衣に薫染せしめなさい、といふのであらう」と書いたうえで、「榛原」を「榛の木原」とする説を多くの例証を示して批判している。

そのためこの歌に割いた紙数は他の二倍になっている。万葉学者の森本治吉は昭和十七年四月に発行された『万葉精粹の鑑賞』（大日本雄弁会講談社）の中で、「萩説の人は、これを美しい萩の花を摺染にすると説く。さういふ人は、榛の木の実が摺染できるといふ簡単な、それでゐる重要な一事実に心づいてゐないだけでも、萩説は粗漏である」と述べている。

右の書簡の「秀歌には、今泉忠男氏のこと書きもらし候、久松氏よりもはやく書かねばならぬ」とあるが、茂吉は『万葉秀歌』の第二刷において、「引馬野は（中略）三方原の南寄に曳馬村があるから、其辺だらうと解釈して来たが、近時三河宝飯郡御津町附近だらうといふ説（今泉忠男氏、久松潜一氏）が有力となつた」というふうには括弧の中に書き加えた。堀内へも「学説につき、今泉氏増補いたし置き候」（昭和十三年十二月九日付）と手紙を書いている。『万葉秀歌』よりも後に出た右の著書において森本治吉は「『引馬野』は三河の国の地名である。江戸時代以来久しく遠江国の曳馬村だと言はれてゐながら国が違ふので疑問視されてゐたが、久松博士の『万葉集考説』に三河国宝飯郡御津村の地と説かれてから諸学者之に従ひ定説となつた」と述べ、今泉忠男の名を記していない。国文学者としてのプライドが医師の今泉忠男に先行されたことを認めようとしないふうに作用しているかとも思われる。

また、茂吉の言う「久松氏よりもはやく書かねばならぬ」は、学説がプライオリティーを争うという一面からいへばしかたのないことだったが、結果的には右に示した森本治吉の著書にあるように久松潜一の手柄ということになっている。なお、今泉忠男の説は、昭和九年五月一日発行の「発酵」（東京慈恵会医科大学文芸部）に発表されたもので、のちに、大幅に補正したうえで三河アララギ会から『引馬野考』として発行しているが、ここでは詳細は省く。因みに、久松潜一の『万葉集の地誌的背景―引馬野、安礼乃崎考―』が発表されたのは昭和九年十一月発行の「文学」においてであった。今泉忠男は右の『引馬野考』の補遺の中で、久松潜一の説について、「これは私の『引馬野考』を直ちに裏書きして頂いた如きものであるから、殆ど決定的と言つてもよい程の権威のある万葉学者の有難い文献といふことが出来る」と述べている。

御津磯夫（今泉忠男）の短歌に茂吉を偲んだ、

阿礼の崎もとめゆきつつ冬くさのなびく噴井をこえ  
たまひにき  
昭和三十一年（『陀兜囉の花』）

がある。

# 和歌から派生した季語の本意（その十六）

「笹」 佐藤喜仙

45 冬の夜（夜半の冬・冬の夕・寒夜）

「冬の夜の明かしもえぬを寝ね宿すに吾はぞ恋ふる妹が直香に」  
笠金村（萬葉集）

「思いかね妹がり行けば冬の夜の川かぜ寒み千鳥鳴くなり」  
紀貫之（拾遺集）

奈良・平安の時代の冬の夜は、早くから雨戸を閉め屋内で

寒気に耐え、炬火を囲んで特に庶民は早々と寝たのである。現在の生活様式からは想像することも難きことであつたらう。

例句

寒き夜や探れば窪き老が肩

太祇

戯曲よむ冬夜の食器受けしま、

久女

葡萄酒の滓引にほふ寒夜かな

甲子雄

46 枯蘆（蘆の枯葉・枯蘆原・寒蘆）

「津の国の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風わたる也」

西行（新古今集）

「遠方に家ゐやすらむ難波がた蘆かり小舟しげくゆきかふ」

紀井（堀川百首）

冬が深まると枯れきつた蘆は、花もほおけ飛び、葉も下から散つて、枯れ色の茎だけが竹の様に林立する。日本は古来蘆の多い国で「葦原の国」などという古称があつた。特に難波は蘆の多い所で古歌には難波の蘆を詠んだものが多い。

例句

枯蘆や難波入江のさゝら波

鬼貫

はるかより枯蘆原の昴りくる

素逝

刈りす、みゆき枯芦に囲まるる

稚魚

47 冴ゆる（冴え・鐘冴ゆる・影冴ゆる）

「わが衣手に置く霜も氷に冴えわたり降り降る雪も凍りわたりぬ」

詠み人知らず（萬葉集）

「こがらしの雲吹き払ふ高嶺より冴えても月の澄みのほるかな」

源俊頼（千載集）

寒さがきわまり、透徹した感じであり、よどみのない冷たさをいう。感覚的言語であり、音、光、色などを対象に詠む

ことが多いが、感性が働かなくてはならない。

例句

さゆる夜や田毎に月はうつれども

虚舟

ひとりゐて壁に冴ゆるや昼の影

木歩

冴えて書得天金浮けり病世界

秩父

## 「氷魚」のことから (130) 岡本八千代

凄じい台風十五号がやつと去った。今朝はまた太陽の光が輝きはじめた。大自然の成り行きにはかなわなない。

松山や秋より高き天守閣

正岡子規の俳句である。(読売・9月19日・長谷川權「四季」より) 秋の空より高く見えた松山城を詠んだ一句。実際は、その天守閣は小さいが、城は山の上にある。それが秋の空より高く見えたという、子規らしい勇ましいとらえ方が詠まれていると思う。

ここからは、子規の小説「一日物語」の木田君の話「三」からまとめてみる。

三。

・小玉屋の玉吉は、本店の玉屋の主人のお使いで、これから羽後の横手という所へ行こうとしている矢先、また、玉屋から使いが来たのだった。

・それは、六郷に住んでいる五兵衛さんという人が病氣だから早く行ってあげなさいという手紙を持ってきたのだった。ただ「幸助」と書いてあるだけの……。

・玉吉の幼い頃の名前は「幸助」であった。よく見ると、自分の本当の父親からの手紙だった。今か今かの病氣ではないが、老人ゆえ、全快は覚束ない様子。

四。

・玉吉は、六郷へ行くことの方が中心のようになってしまったが、玉屋の主人の使い役の横手へも行くことにした。

五。

・玉屋の主人は「うちの使いを先にすませれば、後は父上の処に幾日いてもいい」「小玉屋の店の方は、こちらが受けておくから」とも言ってくれた。

・そして汽車に乗った。——そこへ一人の女が玉吉の前の席に会釈して腰掛けた。

六。

・玉吉の左の方に、年令三十四五の色の黒い男(両眼が鋭く光っていた)

・右の方には年令二十七八の女性がいた。その女が自分に眼くばせをしきりにする。

・玉吉は、もしやと思つて、自分の懷中に手を入れて、胸巻を探つてみたが、大事なものは安全であった。

七。

・女が玉吉に「黒沢まで行かれますか」と問う。自分は「横手まで」という。

・女は、「私も横手の方へ行きます」という。「ご一緒にお伴を願います、今夜中に横手へ行きます。」という。女はまたも、

・「あなたの隣の男の人が何だか怪しい目付をしているから油断しないで」という。

・黒沢尻という処で玉吉と女は下りて、ふとみると、かの男もここで下りた。——

羽後は今の秋田県の大部分と山形県の北部。羽前は山形県。両方とも今の滋賀県から中部地方の山間部を通つて奥羽地方に至る。

## ことのはスケッチ (395)

「英訳」3

今 泉 由 利

Daniel Sommariva 援護

ねがねを掛け3Dの映画を見めがねを掛けレーザー治療

I alter my vision,  
Once to enhance the 3rd dimension,  
twice to protect me from a blinding light,  
and finally to find my way around,

深々と森の緑の育くみし朝の空気に私を晒し

The forest purifys the winds and at the break  
ot dawn the breeze tills me and cleanses  
me tenderly.

夜の闇の網戸にひとつ留まりゐる源氏螢を見守り居たる

As I glare into the night, the spackle of a single firefly  
catches my vision.  
I ponder the firefly's motive and solitode and then  
realise It's there for me.

朝の日はいまだ閉ざせる瞼まで木漏れきたりぬ中軽井沢

Laying in a forest surrounded by trees.  
I have awoken warm rays of light brush,  
my eyelids through a canopy of leaves.  
Dawn has broken.

## 和菓子街道 (61)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

四日市を出て、日永の追分で伊勢海道と別れて東海道を進むと、道はやがて采女の里に入る。奈良時代、ある采女(女官)が失敗をおかし、天皇の怒りを買った。しかし、采女が詠んだお詫びの歌にいたく感心した天皇は、許して褒美まで与えた。その采女の郷里が、そのまま采女という地名になったのだとか。

これとは別に、日本武尊にまつわる伝説もある。伊吹山の賊と戦って深手を負った日本武尊が、剣を杖代わりにしてこの地の急坂を上った。その時、献身的に介抱した采女のために歌を詠んだため、采女の地名がある、というものだ。

明治16年(1883)創業の四日市の花月堂本店では、この雅な地名を冠した最中「采女の里」を製している。鄙びた山里の家を模ったこ



の最中をリュックに入れて、日本武尊伝説の残る杖衝坂を上っていく。ここまで来れば、次の石薬師宿はもうすぐだ。

山里の家の中には、羽二重餅を忍ばせた粒餡が。

◆花月堂本店

住所: 三重県四日市市本町7-11

電話: 0593-52-3131

## お知らせ

▽十二月号原稿は、十一月一日(火)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考慮あわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は、毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

## 原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A  
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

## 編集後記

▽台風十五号が大きな災害をもたらした、去った途端に秋は二氣にやって来ました。

自然のもたらす過酷さに打ちのめされます。時には、自然は大きな抱容力で我々を包み込んでくれるかと思えば、時には、非情な残忍さで我々をつき放します。先人達はそんな自然を愛し、歌に、句に、絵画にと表現して来ました。

穏やかでも静かな秋は日本人好みの季節ではないでしょうか。自分に与えられた自然の中で秋を詠みたいと思います。

△八月に杉浦弘先生がお亡くなりになりました。最後まで三河アラギに御貢献下さりありがとうございます。御冥福をお祈り致します。(平松)

## 三河アラギ規定

◇「三河アラギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アラギ」会員であることを必要とする。  
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができます。

◇会員には毎月歌誌「三河アラギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一ヶ年分二万円の前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成十三年十月二十五日印刷 第五十八巻 第十一号  
平成十三年十一月一日発行 定価 六百元

### 編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目勝弘

### 発行人

平松 裕子・山口千恵子

### 発行所

今泉由利

三河アラギ会  
豊川市御津町御馬西三七  
TEL (〇五三三)七五二〇〇九  
振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九  
UR L Email yuri88@cronos.ocn.ne.jp  
Homepage http://maizumiyuri.jp/  
印刷所 株式会社 桜創美